

# 中学生・高校生の社会的態度に関する研究(Ⅳ)\*

久世敏雄 浅野敬子<sup>1)</sup> 伊藤義美<sup>2)</sup>  
後藤宗理 宮沢秀次<sup>2)</sup> 二宮克美<sup>2)</sup>  
池田博和

## Ⅰ 問 題

大衆社会論は1940—50年代から政治学や社会学において重要なテーマのひとつとして扱われてきた。それらは高度に産業化された社会の、構造的な特質を問題としてきた。そこでしばしば問題とされるのは、「個人と国家(そしてビッグビジネス)との間にある中間集団が無力となったために、ばらばらになった個人が中央の権力によって一元的に操作される」ことおよび「所属集団への個人の過剰同調」である(作田, 1966)。

大衆社会論が主として分析の対象としてきたのはファシズムの母胎となった第一次大戦後のドイツ社会と、第二次大戦後のアメリカ社会である。前者は主として前近代的共同体社会から大衆社会への転化を問題とし(Mannheim, K., Kornhauser, W. など)、後者は大衆社会を市民社会の過剰成熟の形態とみた(Riesman, D., Mills, C.W. など)。すなわち、共同体社会—大衆社会、市民社会—大衆社会という相異なるふたつのコースが考えられていることになる。大衆社会を前近代的共同体社会の市民社会形成の失敗とみるにせよ、市民社会の発展あるいは墮落の結果とみるにせよ、そこでは市民社会との対比が重要なモメントとなっていると考えられる。

作田(1966)はこの市民社会と大衆社会との比較検討を行なっている。彼によれば市民社会の構造原理としては1)個人主義、2)万民平等主義、3)機能代表制、4)集団自治制、があげられ、しかも1)個人主義と4)集団自治制(ないしは集団主義)、2)万民平等主義と3)機能代表制という相矛盾する原理が互いに均衡を保っているところにその特徴があるという。これに対し大衆社会では、これらの対抗関係がくずれ、個人主義と機能代表制が活力を失っていくのだとしている。

大衆社会の特質として問題とされる中間集団の無力化

はこの機能代表制の衰退の側面に、また過剰同調は個人主義の衰退の側面について言及しているものと考えることができよう。

我国でも1957—58年を中心として大衆社会論が盛んであり、数多くの研究、論評が発表された(松下, 1956; 松下, 1957; 城戸, 1957; 綿貫, 1962; 南, 1963; 作田, 1966など)。特に日本ではアメリカ社会学の影響下に研究がすすめられていたが、日本社会はむしろドイツのように、近代市民社会の成立をまたずして大衆社会化への道を歩んだとみなされ、日本社会の状態に即した分析が必要とされる。また大衆社会状況の下での個々人の内に、大衆社会的な態度がいかんして形成されていくかについての実証的な研究も必ずしも十分にされてきたとはいいがたい。

さて、我々は1972年度以来、中学生・高校生に対する縦断的調査を重ね、保守的態度、革新的態度、および大衆社会的態度の3つの側面から社会的態度の発達をとらえようと試みてきた。4年間の縦断データに基づく先回の報告では主として全体および個人ごとの変動量の分析がなされ、①3つの態度値についての量的分析の上からは、中学生・高校生の時期には社会的態度にほとんど変動が認められないこと、②特に男子においては大衆社会的態度が強くなる傾向がみられること、③質問紙調査の結果と、面接によってとらえられた社会的態度の間にはある程度の関連が認められること、の3点が指摘された。

本稿においては、現在の中学生・高校生の大衆社会的態度がどのようなものであるか、また大衆社会化のプロセスはどうか、を解明していくための第一のステップとして、中学生・高校生の社会的態度について、特に大衆社会的態度を中心にしながら、より詳細な検討を加えていくこととする。そのために今回は、各社会的態度の平均値およびその変動、態度間相関値およびその変動、項目間の関連性、他調査との関連にもとづいて分析してみる。

なお、大衆社会化へ向かうプロセス、およびそれに寄与する要因の問題についてはここでは必ずしも十分に扱

\* 本研究の資料分析のための計算は、名古屋大学大型計算機センターFACOM 230—75によった。

1) 中京女子大学

2) 名古屋大学大学院教育学研究科博士課程(後期課程)  
教育心理学専攻

えないので第Ⅴ報以降に譲る。

## Ⅱ 方 法

### 1. 社会的態度に関する質問紙

ここで使用された質問紙は表1に示すように、保守的革新的、および大衆社会的態度として用意されたそれぞれ13項目、計39項目の質問から構成されており、非常に賛成、賛成、賛成とも反対ともいえない、反対、非常に反対の5点尺度で評定を求めた。質問紙構成の具体的な手続きについては既に報告したとおり(久世・速水, 1974)である。また調査の信頼性については再テスト法によって検討し、比較的安定した結果が得られている(久世・後藤ほか, 1977)。

各調査対象の各項目への反応には、非常に賛成に対し5点、賛成に4点、賛成とも反対ともいえないに3点、反対に2点、非常に反対に1点を与え、3つの社会的態度ごとに合計値を算出した。以下で態度得点という場合はこの合計値をさす。態度得点は39点を中間点として13点から65点の範囲をとり、数値が大であるほどその態度が強いことを示している。

表1 保守的、革新的、大衆社会的態度項目  
保守的の態度項目

- |    |                                 |
|----|---------------------------------|
| 1  | (1)* 国の政治は政治家にすっかりまかせた方がよい      |
| 2  | (4) 女が政治などに口だしすべきでない            |
| 3  | (7) 結婚は家柄を重んじなければならない           |
| 4  | (10) 伝統や習慣は尊重すべきである             |
| 5  | (13) 世間をわたるには義理や人情が最も大切である      |
| 6  | (16) 長男が家をつぐのは当然だ               |
| 7  | (19) 親孝行は子どもの義務である              |
| 8  | (22) 目上の人にはもっと敬語を使った方がよい        |
| 9  | (25) 学校で定めている校則にはどんな場合にも従うべきである |
| 10 | (28) 世の中の秩序を守るために上下関係はなくてはならない  |
| 11 | (31) 日本は天皇を中心にまとまるべきである         |
| 12 | (34) デモやストでさわぐのは民主国家の恥である       |
| 13 | (37) 家庭では父親がすべての実権をにぎるのが望ましい    |

革新的の態度項目

- |   |                             |
|---|-----------------------------|
| 1 | (2) 個人の自由は尊重すべきである          |
| 2 | (5) 正しいことであれば世間体など気にすべきではない |
| 3 | (8) いくら恩義のある人でも筋道のとおらない頼    |

- |    |      |                                       |
|----|------|---------------------------------------|
|    |      | みごとは断った方がよい                           |
| 4  | (11) | 社会のために正しいことであるなら親の反対をおしきっても行動すべきである   |
| 5  | (14) | いくら伝統だからといっても不合理なことはやめるべきである          |
| 6  | (17) | デモやストをするのは労働者の当然の権利である                |
| 7  | (20) | 先輩の意見でも、まちがっていると思えば、納得できるまで議論する       |
| 8  | (23) | 男女の交際は全く自由であり、まわりの人とやかく言うべきでない        |
| 9  | (26) | 政治をよくするためには、もっと進歩的な人から多くの代議士を選出すべきである |
| 10 | (29) | 家庭内の仕事は男女平等に分担すべきである                  |
| 11 | (32) | 「方角が悪い」などということはまったく信用しない              |
| 12 | (35) | 結婚式などの儀式はなるべく簡素化するのがよい                |
| 13 | (38) | 家庭では子どもの意見も大人の意見と同等に尊重されるべきである        |

大衆社会的態度項目

- |    |      |                                     |
|----|------|-------------------------------------|
| 1  | (3)  | 流行語などはよく知っていないとはずかしい                |
| 2  | (6)  | 労働者や大学生のストライキやデモ活動などは関心がない          |
| 3  | (9)  | みんなが見ているテレビ番組を見ていないととりのこされる気がする     |
| 4  | (12) | 国の法律が望ましいものかどうか考える必要はない             |
| 5  | (15) | 中・高校生の時代には政治の問題など考えるよりレジャーを楽しんだ方がよい |
| 6  | (18) | 理論よりフィーリングやムードが大切である                |
| 7  | (21) | 誰が衆議員の選挙で当選しようとする日本の政治はかわらないと思う     |
| 8  | (24) | 今の世の中では平凡な家庭の中にささやかな幸福を求めた方がよい      |
| 9  | (27) | 共同募金や歳末助け合い運動があるとなるべくさけるようにする       |
| 10 | (30) | ベトナム戦争など日常生活とかけはなれた政治問題など考えるのはめんどうだ |
| 11 | (33) | いつの世でもお金がなければ幸福にはなれない               |
| 12 | (36) | 皆と同じような持物や服装をしていないとひきめを感じる          |
| 13 | (39) | 公害問題は被害者と加害者だけの問題である                |

\* この番号は質問紙の番号で、以下項目番号はすべてこれによった。

## 2 価値意識に関する質問紙調査

社会的態度に関する質問紙調査の結果についてさらに詳細な検討を加えるため、教育学部田浦研究室での価値意識に関する調査の結果との相互関連を求めた。この調査では、親孝行、日本の将来の目標、男女交際等、いくつかの事項について、伝統的価値志向、中庸的価値志向、革新的価値志向として用意された意見のうちから、被調査者の意見に近いものを選択させる。調査項目の一部は末尾に掲げる。

## 3 調査対象および調査時期

被調査者は名古屋大学教育学部附属中学および高校の生徒である。ここでとりあげる縦断資料の調査対象は、昭和47年度から52年度にかけて、中学1年から高校Ⅲ年まで引き続いて在籍し、毎年この調査をもれなく受けた男女生徒（Aグループ）および、昭和48年度に中学に入学し、昭和52年度（高校Ⅱ年生）まで引き続いて在籍し、この調査をもれなく受けた男女生徒（Eグループ）である（表2）。

また横断資料の調査対象は、昭和52年度に中学および高校に在籍し、調査に対し有効な回答をした男女生徒である（表3）。

調査の実施方法は集団実施によった。また調査時期は各年度の12月から1月の間であった。

ここでとりあげられた被調査者がサンプルとして片寄りがなくについては久世・速水（1974）において既に報告したが、名古屋市近郊都市の中学生および高校生の調査結果は附属中学・高校の生徒のそれと同様の傾向を示していた。

表2 縦断資料の被調査者の内訳

	男	女
Aグループ	30名	23名
Eグループ	20名	21名

表3 横断資料の被調査者の内訳

	男	女
中学生	111名	114名
高校生	200名	184名

## Ⅲ 結果

### 1 態度得点の平均値およびその変動

保守的、革新的、大衆社会的態度の3つの態度ごとに態度得点を算出し、Aグループ、Eグループ各々男女別に、学年ごとの平均値を求めた（表4、表5）。

表4 6年間の態度別平均値（Aグループ）

性別	平均 社会的 態度	および 標準 偏差	学年					
			中1	中2	中3	高I	高II	高III
男	保守的	M	37.20	36.50	35.17	36.53	35.10	36.03
		SD	4.05	4.29	3.67	3.96	4.25	5.20
	革新的	M	47.33	46.97	46.17	45.87	47.10	46.13
		SD	3.67	3.61	3.50	3.72	3.88	4.69
	大衆社会的	M	31.60	32.63	33.90	33.57	33.63	33.23
		SD	4.72	5.23	4.20	5.53	5.64	5.78
女	保守的	M	36.91	34.91	33.26	33.30	34.09	33.48
		SD	5.52	4.91	4.45	5.27	5.38	5.59
	革新的	M	47.04	47.09	46.87	45.48	46.43	45.83
		SD	3.54	4.18	4.09	3.79	5.08	3.69
	大衆社会的	M	33.48	32.13	32.43	34.48	33.48	34.09
		SD	6.70	4.96	5.83	6.96	6.71	6.61

表5 5年間の態度別平均値（Eグループ）

性別	平均 社会的 態度	および 標準 偏差	学年					
			中1	中2	中3	高I	高II	高III
男	保守的	M	35.40	33.05	35.20	35.20	36.45	
		SD	4.09	5.83	4.82	5.48	5.57	
	革新的	M	48.75	46.75	46.90	47.65	46.45	
		SD	3.78	6.01	5.80	5.82	6.79	
	大衆社会的	M	33.75	35.50	35.60	36.70	36.45	
		SD	5.80	6.69	7.19	6.70	5.98	
女	保守的	M	35.48	34.67	35.24	34.24	35.86	
		SD	5.59	5.42	5.33	4.88	4.80	
	革新的	M	46.33	45.81	44.38	44.81	44.24	
		SD	4.25	4.92	5.64	5.38	3.82	
	大衆社会的	M	33.38	35.19	36.43	36.62	37.24	
		SD	4.96	4.10	4.65	5.17	3.70	

3つの態度得点を比較してみると、革新的態度得点は全般に高く、大衆社会的態度得点は相対的に低い値を示している。

次に学年ごとの態度得点の平均値の変化をみるために各態度ごとに学年間の平均値の差の検定を行なった。

男子については保守的の態度得点はAグループでは高校Ⅱ年が高校Ⅰ年およびⅢ年よりも有意に低く、Eグループでは中学2年が中学1年よりも有意に低かった（いずれも $P < .05$ ）。革新的態度得点にはいずれのグループにも学年間の有意な差はみられなかった。また大衆社会的

中学生・高校生の社会的態度に関する研究 (Ⅳ)

態度得点についてはAグループで中学3年が中学1年よりも有意に高かった ( $P < .05$ ) が、Eグループでは有意な差はみられなかった。

一方女子についてみると、保守的態度得点についてはAグループでは中学3年、高校1年、Ⅱ年、Ⅲ年が中学1年よりも低い値を示していた (それぞれ  $P < .01$ ,  $P < .01$ ,  $P < .05$ ,  $P < .05$ ) が、Eグループではそのような有意な差はみられなかった。革新的態度についても、Aグループでは高校1年で中学2年よりも低い得点を示す傾向があった ( $P < .05$ ) がEグループでは有意な差はみられなかった。それに対して、大衆社会的態度についてはAグループでは中学2年より高校1年、Ⅲ年で、中学3年よりも高校1年、Ⅲ年で有意に高い得点を示し (いずれも  $P < .05$ )、Eグループでも中学1年よりも中学3年、高校1年、Ⅱ年で、中学2年よりも高校Ⅱ年で有意に高い得点を示していた (それぞれ  $P < .05$ ,  $P < .05$ ,  $P < .01$ ,  $P < .05$ )。

以上のように、男子の場合には一貫した変化の方向はみられない。大衆社会的態度得点については全般に平均値が学年が進むにつれて高くなる傾向にあることが伺われるが、有意な差が示されたのはわずかである。

また女子については、大衆社会的態度については学年が進むにつれて態度得点が増大する傾向にある。革新的態度得点については全般に低下の傾向が伺われるが、そ

れは必ずしも明確ではなかった。また保守的態度得点については、AグループとEグループとで変化の傾向が一致していなかった。

2 態度得点間相関およびその変動

3つの態度得点間の相関係数を学年ごとに算出し、表6、表7に示す。

全般的にみて保守的態度得点と革新的態度得点、および革新的態度得点と大衆社会的態度得点とは負の相関関係を、保守的態度得点と大衆社会的態度得点とは正の相関関係を示すことが多かった。しかしながら、その関係は必ずしも一貫したものではなかった。

保守的態度と革新的態度は一般には背反的な態度であると考えられるが、Eグループの女子で中学2年以降、一貫して有意な負の相関関係が示されたのを除けば、わずかにAグループ女子の中学2年、Eグループ男子の高校Ⅲ年で有意な関係がみられたのみである。またその変化の様相についても、Eグループの男女については、中学1年よりも高学年で負の相関値が高くなっているが、Aグループの男女については、変化の方向は明確かつ一貫したものではない。

また革新的態度得点と大衆社会的態度得点の相関は全般に低く、Eグループ女子の中学2年および高校Ⅱ年、男子の中学1年で有意な負の相関関係がみられるものの

表6 6年間の態度間相関値 (Aグループ)

性別	社会的態度	学年					
		中1	中2	中3	高I	高II	高III
男	保守的 - 革新的	-.164	-.307	-.308	-.264	-.140	-.387
	革新的 - 大衆社会的	-.175	-.124	-.105	.083	.328	-.055
	大衆社会的 - 保守的	.545**	.546**	.494**	-.079	.342	.524**
女	保守的 - 革新的	-.049	-.511**	-.168	-.249	-.172	-.106
	革新的 - 大衆社会的	.052	-.300	-.120	-.365	.016	-.072
	大衆社会的 - 保守的	.099	.293	.507*	.482*	.719**	.607**

\*  $P < .05$ , \*\*  $P < .01$

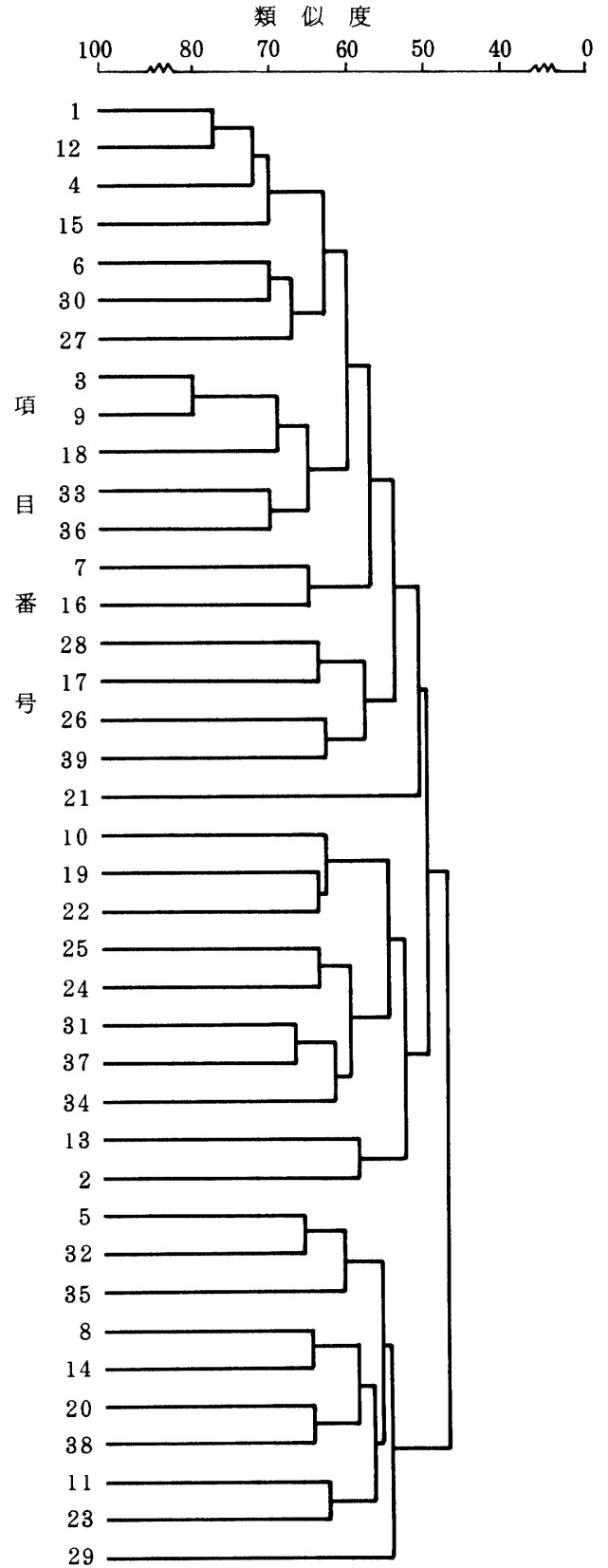
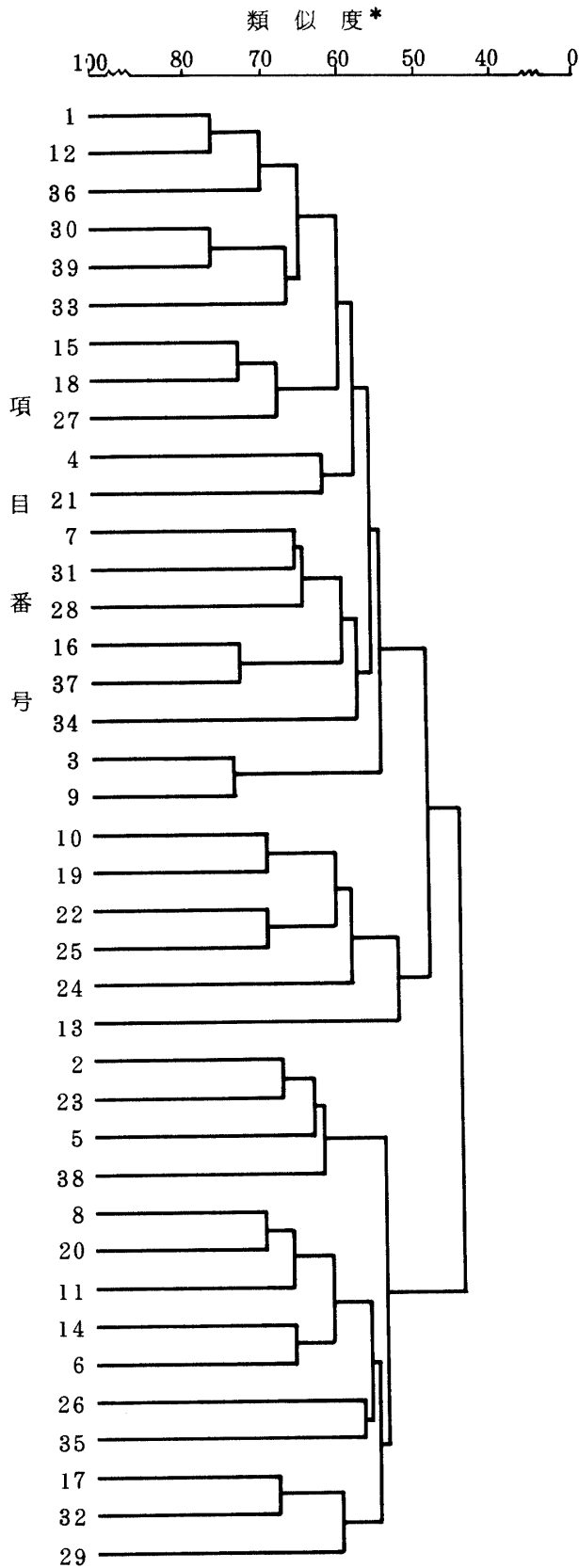
表7 5年間の態度間相関値 (Eグループ)

性別	社会的態度	学年					
		中1	中2	中3	高I	高II	高III
男	保守的 - 革新的	-.058	-.175	-.342	-.330	-.455*	
	革新的 - 大衆社会的	-.532*	-.103	-.085	-.352	-.043	
	大衆社会的 - 保守的	-.013	-.094	.164	.444*	.092	
女	保守的 - 革新的	-.821	-.668**	-.711**	-.730**	-.559**	
	革新的 - 大衆社会的	.014	-.456*	-.030	-.277	-.560**	
	大衆社会的 - 保守的	.397	.466*	.285	.480*	.645**	

\*  $P < .05$ , \*\*  $P < .01$

原

著



\* 類似度は相関係数を換算したもので類似度50が0となるように工夫されている。以下、図2, 3, 4も同様である。

図1 クラスタ分析の結果 (中学男子)

図2 クラスタ分析の結果 (中学女子)

中学生・高校生の社会的態度に関する研究（Ⅳ）

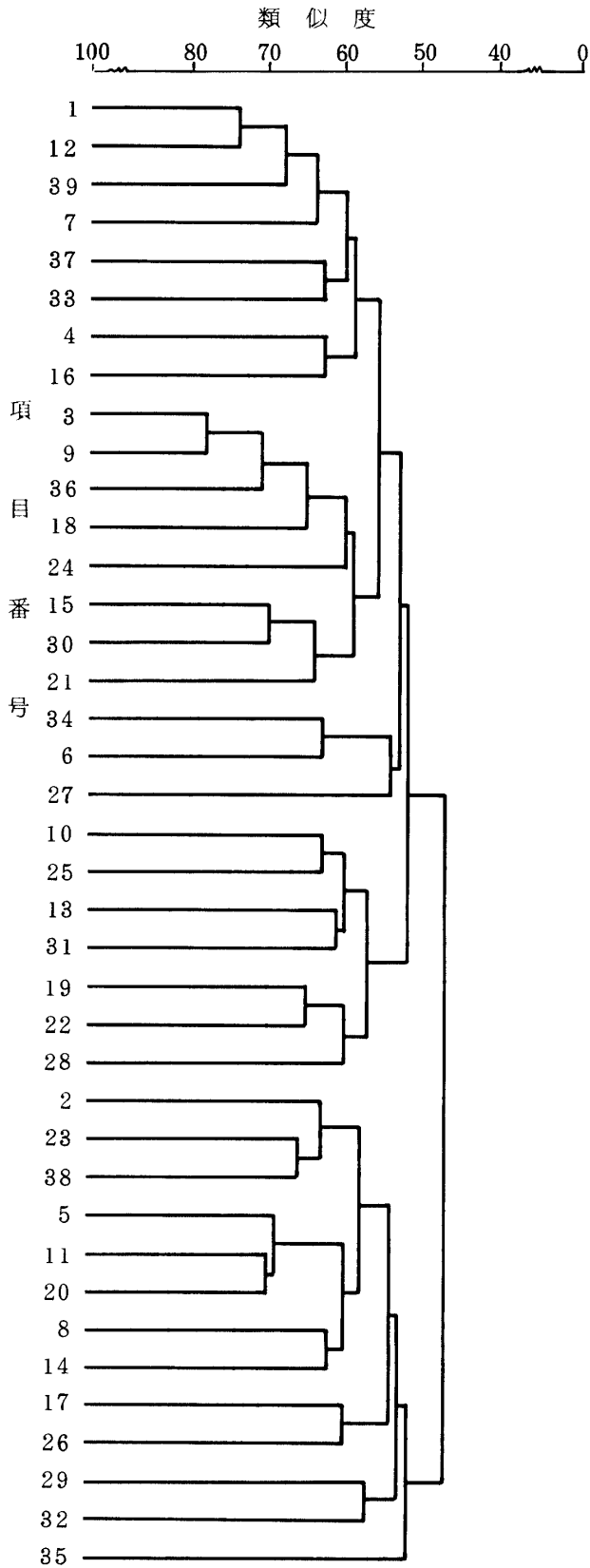


図3 クラスタ分析の結果（高校男子）

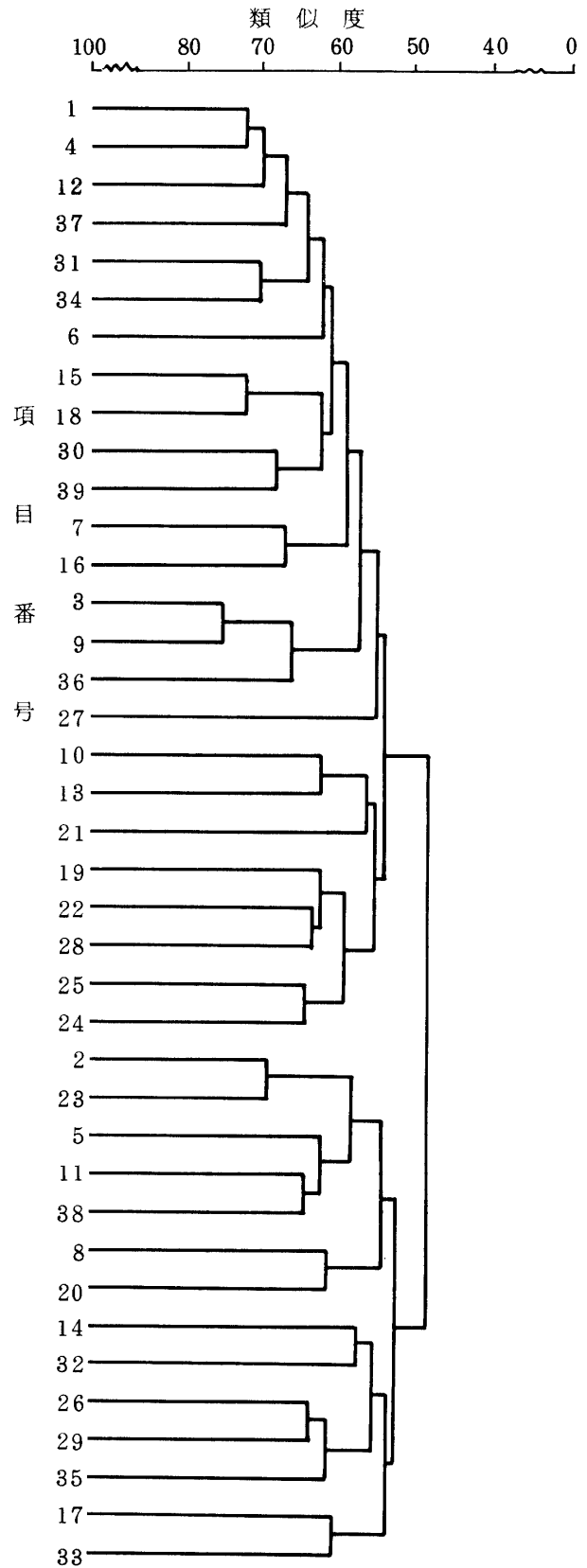


図4 クラスタ分析の結果（高校女子）

Aグループ男子高校Ⅱ年のようにむしろ正の相関関係を示す傾向のある場合もあった。しかしながらこの場合も、その変化の方向は一貫してはいなかった。

一方、保守的態度と大衆社会的態度の間には正の有意な相関関係のみられることが多く、Aグループについては6回の測定のうち、男女とも4回で有意な正の相関関係を示している。またBグループでも女子については5回の測定の内3回で正の相関関係を示している。しかしながらこの場合も、学年が進むにつれて正の相関値が高くなるというような、一貫した変化の方向は認められなかった。

### 3. 項目間の関連性

#### ① 社会的態度項目間の関連性

1. 2では、保守的、革新的、および大衆社会的態度得点として、それぞれ13の質問項目の反応の合計値を扱ってきたが、ここでは項目間の関連性を手がかりとして、大衆社会性を中心に、中学生・高校生の社会的態度の様相をより明確にしていく。そのためにここでは39項目の質問項目のクラスター化を試みる。

縦断データにもとづいたクラスター分析を重ねることにより、態度構造の学年による変化が明らかにされることが望ましいが、ここではサンプルの大きさにも問題があるので、既に示したように昭和52年度に採取された横断データを利用した。分析に際しては男女、および学年によって異なる分類がされる可能性を考え、中学・高校男女別にクラスター分析を行なった\*

項目分類の手法としてはここでは系統的合併法により、39項目の各々が1クラスターを形成するところから出発して、順次距離の近いクラスターをまとめていくという方法をとった。またクラスター化の基礎となる項目間の類似度としては各項目への反応の間の相関係数を、クラスター間の差異を表わす測度としては、それぞれのクラスターに属する個体間の距離の平均(平均距離)を用いた。

被調査者ごとのクラスター分析の結果を図1、図2、図3、図4に示す。調査項目は全体としてみると大きな3つのクラスターに分けることができ、表8に示すような項目が共通して各々のクラスターにまとめられている。このうち特に高校生女子は第1クラスターと第2クラスターとが近接して、大きな1つのクラスターを構成している。

第1クラスターは全般的にみると表8に示したように、

大衆社会的態度項目と保守的態度項目によって構成されており、1)政治の問題を自分自身の関心領域外に置き、2)高い同調傾向を示し、3)伝統的な家中心の考え方を受容する項目によって構成されている。

この第1クラスターについて各グループごとにもう少し詳しくみると、中学生ではこの大衆社会的態度項目と保守的態度項目とが比較的分離しているが、高校生ではそれらはより近接した関係にあることがわかる。

第2クラスターは全般的には保守的態度項目によって構成されており、伝統的な倫理観とでもいえるものを表わす項目が多く含まれている。

第2クラスターについてグループごとにもとづいてみると、中学生では(13)義理・人情の尊重、が他の項目から比較的独立しているのに対し、高校生では伝統、習慣の重視、親孝行の重視、敬語・校則の尊重等と関連が深くなってきている。このほか、高校男子を除く各群では(24)平凡な家庭に幸福を見出すのがよいという項目がこれらと関連している。

次に第3クラスターは革新的態度項目によって構成されており、高校生になると全体としてのまとまりがややうすれる傾向にある。

以上のように全体としてみると、大衆社会—保守的傾向から革新的傾向に、全体の項目を位置づけることができ、しかも高校生では中学生よりも保守的態度と大衆社会的態度の関連がより深まっていると考えられる。

表8 クラスター分析における中高・男女共通分類項目第1クラスター

(1) 国の政治は政治家にすっかりまかせた方がよい	(保守1)
(4) 女が政治などに口だしすべきでない	(保守2)
(12) 国の法律が望ましいものかどうか考える必要はない	(大衆4)
(3) 流行語などはよく知っていないとはずかしい	(大衆1)
(9) みんなが見ているテレビ番組を見ていないと、とりのこされる気がする	(大衆3)
(36) 皆と同じような持物や服装をしていないとひけめ感を感じる	(大衆12)
(39) 公害問題は被害者と加害者だけの問題である	(大衆13)
(30) ベトナム戦争など日常生活とかけはなれた政治問題など考えるのはめんどうだ	(大衆10)
(15) 中・高校生の時代には政治の問題など考えるよりレジャーを楽しんだ方がよい	(大衆5)

\* この分析には名古屋大学大型計算機センターのSPSS統計パッケージのCLUSTERを使用した。

(16) 長男が家をつぐのは当然だ	(保守6)
(7) 結婚は家柄を重んじなければならない	(保守3)
(18) 理論よりフィーリングやムードが大切である	(大衆6)
(27) 共同募金や歳末助け合い運動がある	(大衆9)
となるべくさけるようにする	

第2 クラスタ

(10) 伝統や習慣は尊重すべきである	(保守4)
(19) 親孝行は子どもの義務である	(保守7)
(13) 世間をわたるには義理や人情が最も大切である	(保守5)
(22) 目上の人にはもっと敬語を使った方がよい	(保守8)
(25) 学校で定めている校則にはどんな場合にも従うべきである	(保守9)

第3 クラスタ

(5) 正しいことであれば世間体など気にすべきではない	(革新2)
(8) いくら恩義のある人でも筋道のおおらない頼みごとは断った方がよい	(革新3)
(20) 先輩の意見でも、まちがっているとせば、納得できるまで議論する	(革新7)
(11) 社会のために正しいことであるなら親の反対をおしきっても行動すべきである	(革新4)
(32) 「方角が悪い」などということはまったく信用しない	(革新11)
(35) 結婚式などの儀式はなるべく簡素化するのがよい	(革新12)
(14) いくら伝統だからといっても不合理なことはやめるべきである	(革新5)
(23) 男女の交際は全く自由であり、まわりの人がとやかく言うべきでない	(革新8)
(38) 家庭では子どもの意見も大人の意見と同等に尊重されるべきである	(革新13)
(29) 家庭内の仕事は男女平等に分担すべきである	(革新10)

② 社会的態度項目と価値意識項目間の関連性

ここでは、社会的態度の各項目と価値意識の各項目間の関連を横断的資料に基づいて検討する。このため、二つの質問紙調査で比較的に類似した事柄を質問している二、三の項目をとりあげる。なお、被調査者は両調査の有効回答者 609 名である。

まず、保守的態度を表わす項目「伝統や習慣は尊重すべきである」と価値意識調査項目「古いものをどのよう

に取り扱おうか」との関連をみると、表9のとおりである。保守的態度の項目得点は、伝統的価値志向者が高くと高く、つぎに中庸的価値志向者の順となっており、保守的態度と伝統的価値志向の間に関連の深いことがわかる。

つぎに、革新的態度を表わす項目「男女の交際は全く自由であり、まわりの人がとやかく言うべきでない」と価値意識調査の「男女交際について」の項目との関連をみると表10のとおりである。革新的態度の項目得点は、「人がどう考えようと自分で決めるべきだ」とする革新的価値志向者が高くと高く、ついで「両親に相談したうえで、自分の考えを決めるべきだ」とする中庸的価値志向者の順となっており、ここでも、革新的態度と革新

表9 調査A(質問10)と調査B(質問6)との関連について

調査B(質問6)の内容	性別	調査A(質問10)の内容 被験者数・平均・標準偏差 価値志向	伝統や習慣は尊重すべきである	
			N	M (S.D.)
古いものを、どのように、取り扱うかについて	男子	伝統的価値志向	49	4.02(0.91)
		革新的価値志向	9	2.56(1.34)
		中庸的価値志向	253	3.44(0.91)
	女子	伝統的価値志向	31	3.65(0.60)
		革新的価値志向	1	5 ( - )
		中庸的価値志向	266	3.34(0.78)

的価値志向との間に関連の深いことがわかる。

さいごに、大衆社会的態度を表わす項目「国の法律が望ましいかどうか考える必要はない」と価値意識調査項目の「生徒会のあり方」との関連をみると表11のとおりである。大衆社会的態度得点は、「とくに関心のあるものが役員になってやればよい」とする無関心型の得点が「生徒の権利であるから生徒だけによって生徒のために行なわれるべきである」とする革新的価値志向者および「全生徒の積極的参加によって校則の範囲内で行なわれるべきである」とする中庸的価値志向者にくらべ高くなっており、大衆社会的態度と無関心志向との間に関連のあることがわかる。

なお、そのほか、若干の項目間の関連を含めて判断すると、保守的態度は伝統的および中庸的価値志向と、革新的態度は革新的価値志向と、大衆社会的態度および保守的態度は無関心型と比較的関連しているように思われる。このことは、社会的態度調査と価値意識調査は、相互にある程度関連のあること、したがって、項目間にある程度の妥当性のあることを示している。



表10 調査A（質問23）と調査B（質問4）との関連について

調査B (質問4) の内容	性別	調査A(質問23) の内容	被験者数・平均・標準偏差	
			N	M (S.D.)
女子生徒が、男の友だちに映画を見に行かないかと、誘われて迷っている。	男子	革新的価値志向	207	4.18(0.83)
		中庸的価値志向	93	3.72(0.88)
		伝統的価値志向	11	2.82(1.58)
	女子	革新的価値志向	169	4.03(0.82)
		中庸的価値志向	129	3.54(0.84)
		伝統的価値志向	0	-( -)

表11 調査A（質問12）と調査B（質問11）との関連について

調査B (質問11) の内容	性別	調査A(質問12) の内容	被験者数・平均・標準偏差	
			N	M (S.D.)
生徒会活動のあり方について	男子*	無 関 心	57	2.40(0.95)
		中庸的価値志向	97	1.96(0.86)
		伝統的価値志向	9	2.44(0.96)
		革新的価値志向	144	1.89(0.86)
	女子	無 関 心	27	2.48(0.83)
		中庸的価値志向	104	1.93(0.64)
		伝統的価値志向	3	2.00(0.00)
		革新的価値志向	164	2.07(0.84)

\* N. A. 4名を除く

#### Ⅳ 討論と今後の展開

社会的態度に関する縦断的調査資料および横断的調査資料ならびに価値意識調査資料との照合から、以下のことを指摘することができる。

縦断的調査の結果から

- (1) 革新的態度得点は高く、大衆社会的態度得点は低い傾向がある(表4, 5)。
- (2) 大衆社会的態度得点は、女子では学年が進むにつれて高くなる傾向がある(表5)。
- (3) 保守的態度得点と革新的態度得点および大衆社会的態度得点と革新的態度得点の間には、負の有意な相関関係が多く、保守的態度得点と大衆社会的態度得点の間には、正の有意な相関関係の多い傾向がある(表6, 7)。

横断的調査の結果および価値意識調査との照合から、

- (1) 社会的態度に関する三つの尺度の項目は三つのクラスターに分けられる。第1のクラスターは大衆社会的態度項目の多くと保守的態度項目の一部で構成

され、第2のクラスターは保守的態度項目の一部で構成され、第3のクラスターは革新的態度項目の多くで構成されている(表8)。

- (2) 高校生における保守的態度と大衆社会的態度の関連は、中学生におけるそれよりも大である(図1, 2, 3, 4)。
- (3) 社会的態度調査と価値意識調査の項目は、ある程度、相互に関連している傾向がある。(表9, 10, 11)。

このうち、縦断的調査資料から得られた知見は、すでに報告した知見とかなり一致する。また、横断的調査資料からえられた知見の一部は、新らしくつけ加えられたものである。

われわれの社会的態度に関する縦断的研究は、あと1年は調査を実施する予定である。また、われわれは、現在、一部の生徒との面接を通して、縦断的調査に関する知見の確認とそれらの態度形成の諸要因を検討中である。これらの資料をふまえた上で、われわれは、今回の知見を含めて総括討論を行なうことにする。

なお、今後の課題として、われわれは、まず、えられたサンプルとは明らかに異なることの予想される商業、工業、農業課程などの高校生との比較を行なう予定である。この予備的段階として、現在、大学生の社会的態度調査を分析中である。さらに、データ収集に関する方法の吟味を行なう予定でもある。

#### 附表 価値意識の調査項目

- 質問4** 佐知子さんは、男の友だちに映画を見に行かないかと誘われて、どうしたらよいかと迷っています。
- a 佐知子さんは、人がどう考えようと、自分で決めるべきです。
  - b 佐知子さんは、両親に相談したうえで、自分の考えを決めるべきです。
  - c 佐知子さんは、両親の判断に従うべきです。
- 質問6** 古いものをどのように取り扱うかについて、三つの意見があります。
- a 古いものは、長い時間をかけて、多くの人びとに吟味され、取捨選択され、歴史の試練に耐えて生き残ったものだから、良いものであるにちがいない。
  - b 古いものは、何でもすべて打ちこわせ。破壊によって、次に何が生まれても、今より悪くなることはない。
  - c 古いものは、確かに歴史の試練を経て生き残った良いものがある。しかし、だからすべて

古いものが良いものであるということにはならない。時代の流れにつれて、現代にそぐわないものも多い。そういうものは改良していかなければならない。

質問11 生徒会活動のあり方について話し合っています。

- a 生徒会活動は、とくに関心があるものが役員になってやればよい。
- b 生徒会活動は、全生徒の積極的参加によって、校則の範囲内で行われるべきである。
- c 生徒会活動は、学校全体の名誉や利益のために行われるべきである。
- d 生徒会活動は、生徒の権利であるから、生徒だけによって、生徒のために行われるべきである。

## 文 献

- 城戸浩太郎 1957 大衆社会の構造 岩波講座『現代思想』Ⅷ 岩波書店
- 久世敏雄・後藤宗理ほか 1977 中学生・高校生の社会的態度に関する研究(Ⅲ) 名古屋大学教育学部紀要(教育心理学科)24 67-83
- 久世敏雄・速水敏彦 1974 中学生・高校生の社会的態度に関する研究(Ⅰ) 名古屋大学教育学部紀要(教育心理学科)21, 1-11
- 松下圭一 1956 大衆国家とその問題性 思想(11)
- 松下圭一 1957 史的唯物論と大衆社会 思想(5)
- 南 博(監修) 1963 マス・カルチャー 紀伊国屋書店
- 作田啓一 1966 市民社会と大衆社会 思想(9)

(1978年7月31日受稿)

## A STUDY OF SOCIAL ATTITUDES OF THE ADOLESCENTS (Ⅳ)

Toshio KUZE, Keiko ASANO, Yoshimi ITO, Motomichi GOTO,  
Shuji MIYAZAWA, Katsumi NINOMIYA and Hirokazu IKEDA

The purpose of this study is to indicate how the adolescents become to have mass-social attitudes.

The subjects are boys and girls in the attached upper and lower secondary school of Nagoya University. We analyzed here a part of longitudinal and cross-sectional data which we had collected. The longitudinal data analyzed here are as follows: longitudinal data for 6 years were obtained from boys and girls who had attended this school from the school year 1972 to 1977. And longitudinal data for 5 years were obtained from boys and girls who had attended this school from the school year 1973 (in the first grade of lower secondary school) to 1977 (in the second grade of upper secondary school) (Table 2). The cross-sectional data were obtained in the school year 1977 (Table 3).

The questionnaire which involves the items for conservative, radical, and mass-social attitude scales, were administered to these subjects. To the longitudinal subjects, the same questionnaire was applied once a year.

The results obtained were as follows:

A. The results based on the analysis of the longitudinal data:

- 1) The mean scores of radical scale are high, and those of mass-social scale are low (Table 4 and 5).
- 2) The mean scores of mass-social scale increase with age, especially in girls (Table 5).
- 3) There are many significant negative correlations between conservative scores and radical scores, and between mass-social scores and radical scores. And there are many significant positive correlations between conservative scores and mass-social scores (Table 6 and 7).

B. The results based on the cross-sectional data :

- 1) The items of the three scales are put into 3 clusters. The first cluster is formed by many mass-social items and some of the conservative items. The second cluster is formed by some of the conservative items. The third cluster is formed by many radical items ( Table 8 ).
- 2) The positive relations between conservative and mass-social attitudes in upper secondary school are higher than those in lower secondary school ( Fig. 1, 2, 3, and 4 ).